

2019年11月18日

【都市経営研究科 都市政策・地域経済コース ワークショップ議事録】

## 第5回「都道府県立図書館の機能に関する一考察」

～市立図書館との関係性を中心に～

開催日：2019年11月15日

講師：大阪市立大学創造都市研究科

都市公共政策研究分野 14期生

同志社大学総合政策科学研究科 博士後期課程

横田 早紀 氏

### 1、冒頭

#### 永田先生からの紹介

まず、前半部分は図書館を題材に話が進んでいくと思うが、図書館はあくまで例示に過ぎず、その背景にある、都道府県と市町村の関わり、分離、役割分担、についてポイントをつかみ、かつ自分で“考える”ことが大切なので意識して欲しい。

後半部分は M2 になって皆さんが恐らく、苦勞しながら仕上げることになるであろう修士論文の準備のしかた、書き方、について、また昨日、演習 I の講義でお話したことの中で、論文作成における最初のポイントである、何を明らかにしたいか？という問題意識とその答の探求方法についても体験談に基づく、参考になる話なのでよく理解して欲しい。

### 2、前半部分

#### ①県立図書館について

図書館といっても大学図書館、私設図書館、国立、都道府県立、市町村立などがある。公立図書館は取り巻く環境が変化しつつある。自治体の財政緊縮化、指定管理者制度、評価・モニタリング制度の導入などである。その中で、県立図書館は国と市町村の間の中間的な位置づけである広域自治体の図書館の意味合いが強くなっている。

#### ②県立図書館と市立図書館の機能に関する公的見解等

(公的見解をまず調べるのが大切)

現在の公益社団法人日本図書館協会によると、戦前の大規模図書館中心・主導型から、中小図書館こそが公共図書館の中心であるという価値の転換が理解できる。

また、文部科学省による 2001 年告示によると基本的には市立図書館が中心であるという見解が分かる。(県立図書館は市立を支援する立場であることが理解できる。)

#### ③県立図書館の機能に関する議論

〈先行研究レビュー〉としては以下の通りである。

市立図書館と比較し、県立図書館はその機能に関する議論自体が不足している状況にある。また、市立図書館との重複、いわゆる二重行政批判にさらされることも多い。県立のほうが蔵書数も少なく、規模が小さいところも出ている。というものもある。

最近の県立図書館の機能に関する論考はいくつかあり、最終的な結論は異なれど、県立図書館の現状に対する認識は概ね共通している。まず、県立図書館も財政が厳しいということ。そして、県立が市立に対する優位性は失われている。3つ目は県立としての機能は独自性という観点ではすでに無くなりつつあるということ。である。

〈都道府県の機能〉としては以下の通りである。

都道府県としての役割を県立図書館としての議論にリンクさせることで背景にある問題を浮き彫りにしようとした。まずは連絡調整機能である。そして広域機能は、河川、海岸などの分野において一市町村の範囲におさまらない分野に関するものである。次は補完機能である。これは、市町村の状況に応じて、市町村の仕事を代替したり、補完するものである。図書館も補完機能の1例として上げられていた。その他、体育館や公民館もある。また、他には擁護支援機能というものもある。

〈小括〉としては以下の通りである。

直接サービス⇔間接サービス、機能分担論⇔全面的サービス論というマトリックスにすると全体像が見えてくる。

コメントあり；学術論文は事実を抽象化して学術的に仕上げるのが大切になってくる。逆に単なる事象の分析ではレポートと言われ批判の対象となってしまうので要注意。

#### ④県立図書館の運営方針等

都立は自分たちの独自色を出している。道立は直接貸出サービスへ注力している。補完型でインターネットを使って道民に本を貸し出すサービスを開始している。これは、二重行政が顕在化する結果となった。

神奈川県立図書館も高知県立図書館も比較的最近、県立図書館がどうあるべきかという議論がなされた。

#### ⑤神奈川県立図書館

この場合、県の役割がどうあるべきかということが悩ましいと言える。神奈川県内には政令市が3市もあり、それぞれ人口が、横浜市40%、川崎市15%、相模原市8%という割合であること。機能の見直しの中では、来館者への閲覧すらしないという案もあった。これは都立よりも厳格であること。県立は市立を支援するバックオフィスの存在に限定するという案など、おいてかなり踏み込んだ議論がなされた。機能の“純化”という表現がなされていた。財政はやはり厳しい状態。結局、この案は実現しなかった。この案の実現を望むわけではないが、県立図書館の機能に関する踏み込んだ議論がうやむやに終局してしまったことは残念。

#### ⑥高知県立図書館

県立と市立が建て替えし、合築で一体化した事例。合築案の中では、貸し出しなどの直接サービスは、県立図書館が市立図書館に委託して行うという案もあったが、最終的には貸出等の直接サービスも、県と市が共同で実施することに。

・県立図書館の第一義的機能は市立図書館の援助であるという市町村支援論はもはや自明

とは言えない。

・都道府県としては補完を求められると無視はできない。神奈川県では規模も大きく余裕のある都市はかなり自立しており県立図書館による支援をあまり必要としていないが、小規模な市町村では、県立図書館による支援や県立図書館による直接サービスの実施も変わらず求める意見があった。

・県行政における県立図書館の優先順位、位置づけや、県行政との関わり方次第で県立図書館の機能の可能性は広がりうる。

・県全体での図書館振興、そして図書館振興にとどまらない、図書館に対する住民からのニーズの開拓をいかに図るか、そのために図書館は何ができるのかという支援は、県立図書館も今後尽力していくことが大切ではないか。パイを広げていくということは県として重要ではないか。

### **3、後半部分**

(学生の質問もあり・記載)

#### ①実際の修論完成までの流れ

アンケート、インタビューは事前準備が全てとあって良い。“そこに行けばなんとかなる”ではアウト！いろいろな都道府県を見て、神奈川と高知に絞り込んだ。(事前に時間をかけた。)役所も議会や予算のときは忙しい。(応対してくれる時期は限られている。)前もって何を聞きたいのかを事前に送っておくことは礼儀である。(少なくとも1週間前)

#### ②修論の理想と現実

含意(インプリケーション)を考える。具体例、事例を通して、一般化して、何が言えるのか？共通の要因は無いのか？を考える。そして抽象化する、また普遍的な事象を探すことを導き出していく。永田先生コメント；公務員の意識改革というテーマを毎年持ってくる人がいる。⇒どうやって測るの？しかし、公務員の意思決定ならばOK！

#### ③準備期間の方がはるかに長い

何を明らかにしたいのか？原因の究明、現状確認をまず行う。先行研究は手を付けられていてブレイクダウンできること。先行研究がない分野は、やっても意味がないのかまたは「材料がないか」のどちらかであることが多い。先行研究を、自分の研究の中にうまく位置づける、取り入れることが大切。ゆえにかなりの数を読むことが必要となる。少し読んで、違うなど感じて、すぐやめることもある。

#### ④リサーチ・クエスチョンをたてる

自分の思い込み、属する立場を捨ててサーベイを行う。

#### ⑤リサーチ・クエスチョンと仮説について

ゼミで先生に早期に担当教員に相談して多角的に見てもらおう。レポートは事実のお話し。修論は普段の作文の世界とは全く違うと覚悟して臨むこと。明らかにしたことを、担当の先生に“ぶつけてみる”のも大切。

#### ⑥データを収集する

読むべき文献をピックアップする。データを収集する。アンケートの実施においては時間的余裕が大切となる。

#### ⑦仮説を検証する

今回の修論は事例研究が主となる。ただし、事例研究はサンプル数としては少ないため、比較や統計分析に比べると、説得力が低いという指摘はなされる。ゆえに、先行研究を引用して事例を増やすことも大切となる。

#### ⑧結果をまとめ発表する

想像以上に時間がかかり、思い通りに書けない。時間的な余裕を持って臨むことが大切。尚、バックアップはこまめに行う。(データの削除 etc.のミスの防止のため。)

### 6、担当者所感

①その年の最高論文の背景、テーマ選定、リサーチ・チクエスチョン、インタビューの事前準備の大切さ等を聞くことができ、大変参考になった。

②図書館を看板に掲げて実は都道府県と市町村の関係を論じたところに大きな意義があったことが理解できた。

③私自身、修士論文は初めての経験で不安も大きいがまずは自分が何を明らかにしたいのか？その答えはあるのか？からスタートしようというイメージができたこと。

④アンケートやインタビューは事前準備で勝負が決まることが理解できた。論文にはオリジナリティは大切だが、実はある一定のルールや事前準備を学ぶ必要があるのではないかと感じた。

(以上、記録は先生及び学生の発言を中心に行った。レジュメ内容は最小限とした。)

以上